



時鏡子粧 中五

特別
^5
6576
5



寛文五年三月十一日

水何



張舟

我如^ま心^こ花^は小^こさ^さる^る心^こ也
醉^す狂^{きやう}ひ^ひ多^た少^{せう}春^{はる}山^{やま}乃^の陰^{かげ}朋^{とも}之^の
騰^と氣^き如^{ごと}月^{げつ}人^{にん}男^{おとこ}泣^なき^き立^たて^て々^々
息^{いき}の結^{むす}也^{なり}く^く如^{ごと}女^{にょ}風^{ふう}呂^{りょ}舟^{ふね}
泪^{なみだ}少^{せう}多^たを^を大^{だい}根^ね不^ふ志^しく^くい^いふ^ふ
去^こ朝^{あした}乃^の計^{けい}い^いふ^ふと^とも^も見^みえ^える^る
去^この^の舟^{ふね}は^は嬉^{うれ}し^しい^い今^{いま}は^は渡^{わた}入^{いり}々^々
波^{なみだ}乃^のさ^さる^る者^{もの}を^を向^{むか}ひ^ひの^の門^{かど}舟^{ふね}

五十一

< 96-146 >

う
控志重れ色立ぬる市北場々
印れた占の母舟本粒母一之
今か八里山人を此便直結了人
印のまの子たてくををりやる母
志重れ跡や此の真まよ道取々
毛入とうくのみ小籠の味取之
体しく印れた着志居極結々
面をふりまぬ袖一志り重母
子けや此小文小泪泣まれ々
七んまのたうまこと新取之
黒髪も河を人尼小成て々々
浮世取らん五の正を白母
戒たは心乃月之雲取々々
泪吹きりーか粒今入之

城山小秋風色も戦々々々
音も熱心阿や文立乃比母
ともしはまの蘇乃更と田中々
上から下粒意世の如た之
禱も親音細い息らう々々
由井此汀小急くさらん母
毛ぬを福倉海老も白砂々々
花毛右色清る水のまあり之
衣敷まの目まを家取り々々
猪乃仕形のをましくいふ母
鯨片く再び羊此時移ゆ々
猿手く油を此粒を取ふ之
庵室の流乃月澄澄取の々々
新車粒佛恩報謝おん母

五十一

清乃の事すくぬく禊の事
 野守を我を宮の丸ぬき之
 立新小宮小ま日此林集々
 後天の事をも思ふ計り
 多く又有人の如神の意
 おさるるをよた袖の事
 小宮の事あり言ひ
 甘あはむ軍旗の板も
 月の刃やまの川を
 一をまて陸奥の文や
 舟をまて後を
 本小見録
 柳の風小を

昔の事と今
 世乃其く
 和泉夫ア北に
 小指一寸
 玉の結よ
 痛者
 ねて
 胸を
 月の
 ぬさ

袋難毛の海小くは様々々
舟よきおあてふ事や蛤舟
杯のさう一事も知波ある
骨此座愛成思ふ中人之
灯乃龍の去向ハ死ク一々
くを吹海くくや月色活存舟
秋よりぬ整ふ比翼連理た々
法と此五葉の意と乾筆松之
山を是屏風立る六々々々
幕此内外の路魚ある舟
浮遊るや天照日親阿々々
舟了八十洲至皆ぬ舟之
あ花の波く乾筆此一番舟
阿の棟瓦喜乃雪舟舟之

温帯舎の杉知寺の垣根を々
うたふ成袖小法みもや舟舟
蕙もも冬の葉と葉の漏々
杖と月尺や仙家の阿々重之
かいよる外ハ舟もまゝ秋の々
木葉をらしく時雨をらしく舟
冬ハ推只黒石をぬく如々々
南海道や那智の御山々之
巡社成るるも心やいら交々
余成法多く水飯焼一舟
崖子此遊えあささ乙子々
花をめぐくや波々々々々之
茶の残とむ川法々々々々々
移るる籠の音根の下向舟

日吉在田子社哉縁雨々
少なき哉呼森の白鳩之
むささびの落葉る神の空に
今日毛程きくく書の月并
出千るる法麗るう地推る
病阿るる中るる入ぬ箱様々
まは人の心物こころ見の心之
唐毛赤坂の天氣志河々
書文

五十句 維舟

五十句 朋之

寛文五年丙申月申旬

河馬

維舟

老音指や武苑路此る古時多
月毛不ぬるる事草也陰長
体之軟道那人の汗の道々
言他多しぬ法も此近舟
作るは海由油路の何ら々々
阿の毛を晴の詩乃舎にら也
唐衣日毛流るる書更ん々
や更た乃流らぬさかり舟

五合

丹心妻家小多...
いさ...
糖...
枯...
奥...
信...
あ...
新...
る...
西...
天...
四...

仁...
折...
味...
胸...
向...
琴...
尺...
鳥...
果...
葉...
神...
今...

二ノ百菊の各枝のつら月の秋々
 山は山多のふりあそびの事也
 引きてて連はるら^奥の
 寺の光のあそびを志すし^奥并
 玉童よ併れ^奥世々
 二世のこ^奥中いたのま^奥人
 ありあ^奥ま^奥い^奥ぬ^奥や^奥あ^奥る^奥々
 笠^奥結^奥つ^奥も^奥白^奥梅^奥の^奥あ^奥り^奥并
 隙^奥時^奥を^奥海^奥か^奥ある^奥解^奥重^奥あ^奥々
 鞆^奥を^奥支^奥馬^奥を^奥い^奥と^奥北^奥風^奥也
 南^奥枝^奥花^奥管^奥とい^奥ふ^奥や^奥は^奥後^奥々
 男^奥山^奥中^奥の^奥隙^奥時^奥乃^奥は^奥海^奥法^奥里^奥并
 河^奥燈^奥は^奥く^奥ま^奥く^奥あ^奥光^奥の^奥か^奥は^奥あ^奥り^奥
 五^奥色^奥の^奥幣^奥を^奥さ^奥る^奥敷^奥く^奥也

三ノ波の音あやう^奥と^奥は^奥あ^奥る^奥
 亦てあ^奥る^奥の^奥波^奥は^奥あ^奥る^奥并
 頃乃うか^奥あ^奥る^奥は^奥あ^奥る^奥并
 昆布^奥地^奥塩^奥あ^奥る^奥目^奥も^奥あ^奥る^奥也
 道^奥草^奥も^奥あ^奥る^奥神^奥も^奥あ^奥る^奥也
 中^奥軍^奥あ^奥る^奥比^奥の^奥舞^奥入^奥城^奥并
 活^奥加^奥増^奥を^奥給^奥る^奥草^奥は^奥活^奥の^奥
 色^奥も^奥あ^奥る^奥あ^奥く^奥は^奥る^奥也
 ち^奥ま^奥あ^奥る^奥強^奥は^奥あ^奥る^奥ん^奥是^奥地^奥也
 螺^奥細^奥乃^奥軸^奥を^奥於^奥古^奥双^奥也
 其^奥も^奥あ^奥る^奥も^奥あ^奥る^奥也
 か^奥く^奥あ^奥る^奥由^奥良^奥の^奥あ^奥る^奥也
 心^奥も^奥あ^奥る^奥也
 二^奥の^奥あ^奥る^奥也

三ツ
 中野と秋ひさこの下流々
 玉乃臺をその下流々
 王位をとりたる室の級々
 名をいふは海留をいふ毎
 腰をいふは袖をいふ毎
 さらさら袖をいふ毎
 ありあり猫をいふ毎
 地をいふは雲の付をいふ毎
 龍をいふはとをいふ毎
 空かく〜の〜と好々
 ある時三原路ゆきゆく
 舟をいふは月のみ書
 阿のむらさきをいふ毎
 春は〜く〜をいふ毎

名

八幡指

名
 舟の〜舟の〜舟の女舟
 舟の槽舟我や〜舟の
 海をいふは深をいふ申々
 鯨をいふは浦をいふ二人舟ん々
 舟舟舟の杖をいふは舟舟舟
 泣ぬをいふは舟舟舟舟舟
 舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
 月影の〜舟舟舟舟舟舟
 別の〜舟舟舟舟舟舟舟
 又舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
 古河舟の〜舟舟舟舟舟舟
 舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
 舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

石山のそやの流とある時と々々
なるく此城の番廻 々々
目定交いよく治する四座 々々
作る田邊の年更ゆる世并の能
け里の東くはとも警昌 々々
移るいたるそ氏神を 々々
ゆふく流をの末流は 々々
歳毛三度ある 々々

五十句 雑舟

乙十句 雑舟

寛文八年三月乙日

何袖

雑舟

三笠や主空我空死の都
たゆる身も言ふは 々々
桑掛の馬杖鹿杖引流 々々
朝霧のく羽太のそと 々々
其の毛那く 々々
かほ空の煙をそ 々々
くすのあふ 々々
皇小ねる 々々

う
 高の加言かげくを換眉目々
 流く子水のくもくぬ中形自
 生好ある事を初此利世々
 報の初ひききまよ海へ毛并
 うた流を業名に見を吹今
 岩成値着りたあくる自
 世派といふは道こそ序田令々
 破三橋乃いとも通小并
 やもくと水の流の親まけ々
 流るぢみと此流はうそ自
 是へもも世枕めら世の山々
 乃一月額意のせめくる并
 毛海の早の遠流の度々
 十日の業あかあれい三自

野のまみ入るはうを麻々
 善教神田の灯明くく并
 流めら糸帯まらへり山々
 首途や流の末長かき自
 山依のくわん流の結と々
 阿の橋のく人えり自
 白るもまて推とす世々
 建ハ蝶々 葉蝶白蝶自
 白土の葉まら葉まら運を々
 赤流と糸津の短日めく并
 里指く子つら此玉まかしく自
 花流めも好むとの綿本
 松流も秋山より乃月々
 流めく開ゆるよや事三并

二ウ
 坂寛橋の妻はるるゆいん
 思ひ遠く所の物束の著
 桃燈の物乃焰の空を曇る
 いはれ中を布祢のくもをく
 意の山鞍馬の程志のゆいん
 まかた業障乃そく神垣自
 小用哉花裁ふらふ心阿ま
 るるやまこよふ落葉秋亦
 明ぬきこよふまは路人の廉
 くま月も匨の清光自
 隠家いりる朝露も意次人
 短衣世もてゆきか榎开亦
 玉の風出湯も花の心よ自
 温能毛を毛たまふくま物亦

探らる毛妻の物とて雨金自
 柳うはれまの羽編くはたぐ
 雲又まの行はまある村
 洗濯衣を岸乃日阿ふり
 波風もゆゆ波まるとの自
 柔小座あま森川隠岐の
 かある岩のを海田新時亦
 龍白苔も月乃既系
 さるる毛を毛今いま自
 世野は東を強を風ト
 思ふる風おのまのなま
 建の成寺は親考ま
 うかまける人を和衣よん自
 心はくしむくつけおとる

三ウ
 昔こそ今ハ平也也宵并
 果
 老もも死る陸路巴の
 作る詩も鳥来入江の夜并自
 月夜物もやかそ
 是ハく別ぬ先も音泪并
 ちきりも阿之六後の出番人
 活心の奥極くハ其悟自
 便宜くハ杉紙の文々
 昔もまきととふ舟の思并
 雪も竹の家くハある々
 言支目毛通ハ伏見地車自
 吹入風も馬毛破戸々
 花の雪ハ嬌ハ聞ハふくかり并
 餅餅頭の午向ハをまぬ々

始も水も奈良の習之三月自
 いこたは流るまき日地嘉海々
 碓氷の古窓ハ毛おんハ并
 西々あける風情也ハ支々
 経度ハ地産ハ肝をけハ自
 今毛ハハと地産ハの昔々
 京より也注よる院ハ横川并
 枚ハ此兒の涼ハハハ
 瓶等もや音也ハ城ハハ自
 雨ハ社頭の上久ハハハハ
 銀帽子ハ音もさるハ橋ハ并
 松葉ハハハハハハハハハハ
 足ハ流の目もさハハハハハ
 蹴あくる鞠の音ハハハハハ

和身此在傳つても下あらず
白雨の雨も志とるの弱乃是自
十市此山乃石をさるるく
穢と深と流の事とさるとあ
来りし深乃出舟いり舟
詞小色花城此世とる自
春乃日用毛集る 普請 舟

五十句 維舟
已十句 如自

寛文五年卯月十六日

何鸕

維舟

卯花や加らん老つ海自見江
初小扇の元所一あ敷衣 風虎
舞乃袖乃江 盃此 紫塵
今日乃 阿の葉 苗長
紅葉さる山流の事とる 虎
雲ふ心 馬道 草鞋
明奴とて 市人小 長
卯とて 出葉屋又 塵

異世のよき世に生かすは
羽せり我志をばつ籠る虎
入江の毛改滿葉の作庭塵
法戸人書よる三輪うはれ
三帆片帆かひきりる走
諸難を祀るまのうぬの結
最後をまげへる魂の神
恨まうたのいふくは時塵
寐言あまのあ局の強兵
是音さるる日北板えむ
是遠雨あつ秋の村時雨
野かけ北かさふ海高草
醉抱ひ人さるる花乃袖虎
疎ふ大乃声をかけるぬ

春山北地よる世を結ん
よき世に生かすは
赤勇士の昔れ事しは出舟
やうき和歌の心やえら虎
あふれの中れ守守隠る塵
寐物かすの色の魂
虎とよあてはらるるて護
作野たれたるの
了向も今を口あふ
隠居りあふ月北明く
活地生れ志の浮橋而入
初壇あふ出せ屋形舟
旅人のたのまもさるぬ
泣乃泪をさるる申

五ノ七

三ノ
 福也之強くも(虎) 此
 陽也江ふも(虎) 酒瓶
 中人引よき(虎) 照
 袖空袖との(虎) 虎
 足(虎) 虎
 思(虎) 虎
 破(虎) 虎
 蛇乃細(虎) 虎
 蚊(虎) 虎
 雲(虎) 虎
 日(虎) 虎
 心(虎) 虎
 以(虎) 虎

名
 作(虎) 虎
 田(虎) 虎
 よ(虎) 虎
 何(虎) 虎
 秋(虎) 虎
 者(虎) 虎
 新(虎) 虎
 あ(虎) 虎
 音(虎) 虎
 寺(虎) 虎
 昔(虎) 虎
 か(虎) 虎
 と(虎) 虎

三つての其の肩の五の
高の志んくはあつた
先達と月と頼て入る
温泉の山乃次を二
孫の兒の春は比
乃うは「雞」の
その里の
乃うも自ら
五

維舟 廿六
風虎 廿六
巖塵 廿四
留長 廿四

寛文六年七月廿七日

矢河

維舟

風虎の松を
窓乃乃の掛金の
白登の
善方より通る
涼む
縹色
屑魚
知行

五

替らぬやいふも今此京我
 大師やうゆ色かくらば後名
 女之秘法法成るとやて元
 寺（まのまの）のまのまのと元
 昨日今日あまもや金のたて踊
 切義の蠟毛なるとや（
 子むまのまのとや）
 越後うたふら物見らちけり元
 女くしとさるくとは元
 年高とも毛蒸履乃供言
 河原座の浮る音もと強言
 けらぬ水河もと縁言
 白と世に化粧も死乃形人元
 梅はゆふの肌はとら元

乃少女やいふ月七月喜元
 去年よるいふ年始の元
 先文はの文い来すと雪の中元
 手繫玉成とは元
 あらそととは元
 國土志のむるとは元
 軍兵乃とは元
 乙ゆとは元
 けとは元
 向小文珠のとは元
 瑞籠者阿とは元
 五人三人野とは元
 出筆相とは元
 屋建加とは元

三
泣きながら我出ら置をきりいれ
雨をたらしくやまぬ種蒔
志んまほや泪小意小浮沈
舟をたう水地味はくも色
水車いんまん淀みく
郭らふま月大ちり小橋
橋を今成さうもの城は
氏成可くはるはあ
野を成まは法をせ
知りきりぬ小あふ鶴持
文成まは酒や入風
草花まるる月も白
尺八さるはむささる
志んまほや置をきりいれ

三
うらぬぬらぬまを乃描乃ぬ
わく三線の書はくはくぬ
尺八のさるはむささる
存成れ風味を又何あら
夢醒もて鯨もまきこも沖
和泉さるの浦乃小座敷
思ひた格氣とらうみ書
思ひた之測測と井地秋風
月小おき地河へ色
入おのまらまら果
あまれ今年も月一坊
園東成あまら何れは利
東海島はまらあ

三ツ
 大かゆ山甚河節もせはゆきよ
 堂塔橋毛神不と事乃る
 風のほららんをちう山も五葉
 せこそ好あまふありあまふ
 けりれ先つを事とてまこや
 明日ハ圖浮の甚を二使と
 ねまはて味さ小業の上の板
 法師ちうらも名のるさ路川
 哥流の言城せよせの言
 旅病小あふ秋と志を物
 馬追ふもあは情を思書
 かのよるやや夕月のかふ
 移香をせ花小のまの葉肌
 酒方杖さる年小錦さる

いく春う家小物さる此力
 今日うあふの痛男そり
 水葉のほらまの茶小先茶
 伊豆家相とて分くまそ
 沂秋の事ささるる湯あふ
 ちうも今ハ命且さるる
 月小縮こけるからさうたら道
 けりれ先つを事とてまこや
 唐清れはまの山金女活賢
 志度のうらむらむら
 目さの事ささるるけりれ先つ
 古れれ其を盤と手此力持
 ちうの事ささるるか何れと起
 一書さるる小別さるるの我

櫓の若狭舟のりつゝの
鏡の金あまのつらのりつゝの
あまのつらあまのつらのりつゝの
あまのつらあまのつらのりつゝの
あまのつらあまのつらのりつゝの
あまのつらあまのつらのりつゝの
あまのつらあまのつらのりつゝの
あまのつらあまのつらのりつゝの
あまのつらあまのつらのりつゝの
あまのつらあまのつらのりつゝの

- 二十一 維舟
- 二十 林元
- 二十 菅言
- 二十 及言
- 十九 友我

寛文五年七月十六日

膝河

維舟

一節小子とてつゝのりつゝの
あまのつらあまのつらのりつゝの
あまのつらあまのつらのりつゝの
あまのつらあまのつらのりつゝの
あまのつらあまのつらのりつゝの
あまのつらあまのつらのりつゝの
あまのつらあまのつらのりつゝの
あまのつらあまのつらのりつゝの
あまのつらあまのつらのりつゝの
あまのつらあまのつらのりつゝの

筒井川の深き情ハ二世ノ母
縁もの子ハ水もたれど言
硯裏文をええ方ハ母ハ言
人ノ鏡まてくまて情ハ元
也揚枝くまてくまて縁砂言
小々性詠屋ハ波朝平水ハ
茶の湯也し習ふ心ノ奥ハ元
物乃透居ル風ハ言くも言
老やも此方ハ言くも言
月小鏡形を命るも言
兵法乃志ある也林ノ海鏡言
石条ノ橋を果ハ言
河原ハ石ノ鼻也言
まの此ハ言

花風風ハ言
雨ハ言
暮雲志也言
堂我守法ハ通言
照月ハ言
裾也言
高言
五合言
母也言
か言
少ぬる言
渡乃言
あ言
小言

二
うらうらの雲をききしとて
散るいははた本目の目跡々舟
野山や煙の細うもり元
頭うせもまはたすゝ雉のさ
胡鬼板もかぶさるせん舟
宮あちまの船よあうよ
泥亀毛浮ぶ活池の鯉や
涼風はさふゆき乃花元
葦の是淨土の玉也量保ま
空く法珠の三部經とわす
かまゆる縄もゆき深淵
継子茂本のさるやう
あふふと糊もそまはた舟
星うらわさるるあふのり

三
蜻蛉のまの思ひも悟道言
きもあまもまはちの中元
節由月のさむらひお櫓言
かあめもあや一秋の小扇舟
飛重あ月うらわの押入元
あはたはまてわう一舟村言
星際あの時け跡もあま舟
汲人のさもあらぬ清水言
比治さきまはも日は暮言
大音あまもまはるあはら言
其もあまも精の輝いん言
右山はくもあまもあま舟
殊勝子のあまもあま舟
あまのあまのあまもあま舟

寸や原皆一揆とて追拂舟

岸のありしもをきく楠木言

うかぢゆえのらぬ物と波舟言

子多阿しむ弱のさかふちえ

浮鳴る腹せいのら引て言

燕飛あそぶ多とれは神舟

妹もよき言も心や在らんえ

大臣あつたけあつたまて言

田舎あつたけあつたまて言

遠草言ふあをむく計言

花の時洲渡り池をわたり言

本成も月も花のめりくえ

糸竹のあつたけあつたまて言

今日晴りし日の賭りた勝舟

言の堀も昔は朋志する様え

後大東よして破くはら言

やとわ木のねる根はえん言

昔のうたらのしくせまう言

病をて乃ちわらわは言

うたのあまよ月よあまのえ

婿入をらよえ言とよわ日言

燕を我をせは言下用し舟

又一葉茂南は言は言

子多振林は納受の言と舟

あつたけあつたけの河を言

あつたけあつたけの河を言

あつたけあつたけの河を言

忘し此情乃思ふ心つとも言
今日と限り此命をたふし
唐里と我摺るうと此指の元
笑ふあふと実目さあ
秋もやと追分と取略綱弁
うさほのたや沢田乃夕言
たふ雨の布留れ花見もか
草餅の法ら陰乃炎さ言

廿五 維舟

廿五 莖言

廿五 通言

廿五 林元

寛文五年十月上旬

何系 号也

維舟

亭をめぐり北田を川かこ

流る小春此意の梅

月を白く照らすと葉隠

能乃強を夜中今

筆物と一事もあらず

不ろ酔此小中様乃夜

う
 厚く着せぬは木枕をたて
 白哉を川練高に曙好
 阿比の月お村をたけり
 大乃おはやくお酒を
 清くおのひお小恨や好
 泪をさすは遠き海を
 眉を繋も乱心の朝陽亦
 形を去るは袖乃好
 葉のま枝小枝多か好
 きて勝利は痛海に好
 ちあはれをうけり
 朝馬はむらじ

名
 落人の心長閑はあら好
 法乃誓もかく志の文好
 泪河流地立起お好
 阿の蠟燭の志ん好
 并給お五夜も三夜も好
 其へ存風小お好
 鳴虫おをのうら好
 月を清ら好
 水梨や水栗松榴好
 此葉此葉菊高け好
 言毎よおと瓶の好
 空く格子小結を好

下心をいふ事いふの極なり
あふは海も申ふ事いふ好
白梅の何をも空へ
李枝真なりたて忠の箱亦
彼岸をいふ事いふ
二月乃重いなまふ山帽
好

維舟十二
長好十二
重方十二

寛文八年九月中旬

何事

維舟

舟の對面物もいふ事いふ相

小舟の舟もいふ事いふの山
良菴

月夜も人小舟いふ海客
月

海客もいふ事いふ乃此
舟

新志く清成の間と
日

むいふ事いふ海客
安樂 菴

二世迄の誓ね母し誰と月

形る初般乃佛我他授舟

尋る古河辺く遠ま世月

情乃水毛経ぬ座から菴

千語文も魂の命也く月

望し出るまらき加恵の標舟

渉重心此哥たふはは語と月

浪乃加川見も堂の尻目菴

涼風色月毛雲ぬ小ま月

欄干小毛くたふくくの舟

咲花此二階辺をを観授月

一室に如る榊木此椿菴

春雨の阿し此里に音籠月

鞠毛やうやく泥心人の舟

江若れうら孫お酔とす月

祚宝城毛冥於る市菴

法田とく作深ある室申月

七川對より八目乃わらん舟

と法也も阿ぬ蓮花の世月

と氣乃其是也か法華安末菴

於以初秋涼し一燈岩山月

照月輪の寺美少女を舟

榊木の五葉七後の皮厚月

鳥乃をなみ舞ふ少用菴

たふた流の奥山室はうら
夏世をまのくこ谷の舟
大相さ此纏の清痛い船の
作小よのく鬼をるる船
荒の倉自志をませけのり月
高珠世ふ志るまめ物舟

維舟十八

良菴十八

寛文十三年五月五日

何故

維舟

前小卷を連て事堂此志の言
行乃子た茂思の中境

五月雨の隙阿のたのをま

路次面白く茶の

月足す六午の此世を

厚乃から指代さるる

う
初汝此満来る淺十ふよ 隆
堂の室物の市此は合 昌
清成小の門系道も志を 昌
手この此能名もを 昌
磯の上磯の守もた田の 昌
かこの口もを 昌
瓢箪此海越うの守も 昌
花乃の守もを 昌
の守もを 昌
百度も越て 昌
引袖の守もを 昌
泪乃越此座もを 昌

名
いふ守もを 昌
三と世此後ハ又この 昌
林守もを 昌
越越すもを 昌
有項天守もを 昌
老乃果張もを 昌
不此の守もを 昌
小船小守もを 昌
身小守もを 昌
守もを 昌
守もを 昌
守もを 昌
守もを 昌

頼此書も清くもくん野の 舟
常袖哉やうてふまかん隆
常書一しあせりかみ家昌
命と保琴此音来乃笛重乃自
立新ふまのゆきま死の角
彈照乃先名桃乃不空 舟

維舟八

高隆七

重昌七

木重七

高南七

寛文十一年三月上旬

河草

維舟

柳樵草刻之久下 澁水寺

八草此書も地王の 瑞龍

昔も此書も湯けりか書も 二書

糖 色来か書一か二舟

月影成書も此道 瑞

阿比書も此書又河も此

鷗乃羽白如雪如梨花
字毛如...
右以名...
芳野...
蝶...
義...

維舟十八

常相十八

寬文十一年三月中旬

何事

維舟

蝶々...
嘗...
振袖...
小石...
阿...
浮...

朝之...
朝之...
朝之...
朝之...
朝之...
朝之...
朝之...
朝之...
朝之...
朝之...

朝

朝...
朝...
朝...
朝...
朝...
朝...
朝...
朝...
朝...
朝...

浅草寺に遠く思ふぬお稽月
茶室もや扇風の下知舟
今朝迄も祢宗此調子月
粟も満ちぬ家歌やと夜
賑々たる夜を更よ
枕を掃毛かきよく産の奴
酒喜舟

維舟十九
毎夜十九

寛文十一年五月上旬

何日

維舟

書之由先志をいふ事不形此
空しく不意に重なる
毛種成歩思たる能ある月
如羅布此何と云律乃舟
換抄の昔は若も出る月
欄干小をくわす重の巻

五

涼風を秋の物とすらん月
 桑之木を常の本とす 喜賀
 流石の神宮をよとあら月
 死にけりともまかしの母 喜賀
 心根成貴夜輝く味柱の月
 女は愛れまふあつちの月
 下は寺の作乃とや上月
 見を舟とて舟は林田大流 喜賀
 昔は雲の誰も雲は尾小月 喜賀
 待万とてとく経度乃月 喜賀
 毛は子金とて子は志月 喜賀
 雲は海とて一とては志月 喜賀

名
 望も成を里のすらん 親心
 塩ももあまの糖は尾小月 喜賀
 蛤成膚のあつちの月 喜賀
 よは海をよとあら月 喜賀
 高は万とてとく経度乃月 喜賀
 あつちの月 喜賀
 蟹あつちの月 喜賀
 今も井筒のあつちの月 喜賀
 空は雲をよとあら月 喜賀
 水は成をよとあら月 喜賀
 雲は起つては雲は高小月 喜賀
 隅からすとも蚊帳織里 喜賀

五言古詩
五月十七日
涼月出空林
清風吹薄衣
露濕草如綠
星垂天似低
不知何處客
正在此邊歸

維舟十九

立靜十九

寬文十一年八月月中旬

弓河

維舟

露殘草亦凋
小秋已至
金負
暮色
風小秋乃
月
露殘草亦凋
小秋已至
金負
暮色
風小秋乃
月
露殘草亦凋
小秋已至
金負
暮色
風小秋乃
月

月 神非時の本音も妙
 面をわめる小指も此前後
 冨白毛流思くも小指月
 和男乃原との奇此種珍真
 流き此の意此人小指先月
 考する小指の子と此歌
 月尺豆下加此盛を得
 月 此支節く事此を山真
 桶乃種此音もあまの月
 洗濯玉ぬのうらあま
 出指此志く小指向此の月
 々や土筆楊葉此垣根真

名 有猫也胡蝶也あ日 月
 此の支節く事此を山真
 桶乃種此音もあまの月
 洗濯玉ぬのうらあま
 出指此志く小指向此の月
 々や土筆楊葉此垣根真
 月 尺豆下加此盛を得
 月 此支節く事此を山真
 桶乃種此音もあまの月
 洗濯玉ぬのうらあま
 出指此志く小指向此の月
 々や土筆楊葉此垣根真
 月 尺豆下加此盛を得
 月 此支節く事此を山真
 桶乃種此音もあまの月
 洗濯玉ぬのうらあま
 出指此志く小指向此の月
 々や土筆楊葉此垣根真

流石小使の心入珠殿と
不うか子あて脇息の上
鏡所不為のこまに形
加藤おとすはく波のた
物種常我毛はるる花の月
梅乃匠なりとも夏世
日

維舟十九

金貞十九

寛文十一年九月と旬

何麻

維舟

年南毛尾花の毛堂や思
鶴齋野成日書乃真
領多月乃秋風所入の月
衣成畢此かこたふ不亦
寺と詠ハ过や蒼小雪
なめ報りら付たか事や

五三九

月
 縁髪控うらめしく引割
 妻小留己世田金やうら
 心小事思ふ見之はく痛
 たや屋まむ急莫あうら
 加く月も泪討よ瘦あけ月
 炭乃乃を煙小むらる子
 多ふけも泣か馬此け合月
 秋毛寂申此社す此的
 親丸交毛月園子袖乙月
 茶屋と夕乃及はまけ
 旅人老生田の花此う袖月
 森乃木目毛思ふ草笠真

名
 望望の毛法一棹此細心月
 萬歳来毛よまをまき丸
 風浪里山毛都あけつ暮月
 水得水の少毛河毛毛真
 夏む交此とてか拙ふ砂糶
 息笑ふゆし所ハる國
 此少の子小依富小目と月
 佛小縁杖結ふ願加桶真
 山陰の煙敷と尋る
 向う見之縁寺毛宇路
 入ね月よお望此里後月
 盆のをる月河る志ん真

蓮花葉の形物に如く池の月
のまじりし音を毛涼風御舟
流るるる心あきら結壺月
隙乃秋落中なるて貞
夢すぬ遠此一花葉如月
天下此世の歳年伐折亦

維舟十八

金貞十九

昔備乃園山山竹下氏
常相去京小少之文学
乃流とあ流から流し且又
詠諧此縁小玉と流るる年
来日東行るる流り歸るる
小文と流るる登り流り
流るとわ川ま一かま一流るる
あし水月廿日遊るる此
阿そたろ志く帰らぬ道中と
中ろえと流るる志ろるる乃
心ろまるとて歌支小志流るる
うかあ湖川をろかろるる此立
居小志流るる袖流るる流り計
来り言た田子久外流るるの

事を遂げんとす後乃ち
心かゝる物に思ふに
かゝる物に思ふに
結ぶる心も
くあはれ
束と結ぶ心も
枕成ると
白草花の
人
細色知や
折る心
有教人の
心は

形見送

束乃ち
先づ
たのみ
乃ち
心
あはれ
あはれ
あはれ

寛文十一年七月下旬

平山

獨吟

維舟

記念の物今も在る所也

浪色も亦くは汗乃と云

燻ぐし御衣戸に此蚊巻焼

小里茂たふみ藪乃たふみ

夕月此類うそをらふ

毛やめんはたきなる

馬乃昔流もなかる林乃

流立阿しは小松はら

林交の流別なる名流なる

志の流かく流し中との

幸もつぬ初流也

うかきゆる人の肌

う流らく現るは世あし

三やう書るはるは流の流

群も多しぬ雨のさ月ハ雲中

声合照志てまをを孰く

明石泊帆掛舟を

着流く室は枕ゆめ

三ノ

五ノ

名
 阿比多志社七重也の道
 三つ重なる由りなる
 意風の吹河内也成る事
 手を重たす事くろそそ中
 七文此今朝の別はなる也
 重なるは流く也なる合入る由
 持重なる言はるゝ社の子
 市子なる言はる月乃すは海
 雲晴く嵐を嫌ふ山の家
 縁乃也なる言はる乃なる塔
 佛舍利をかくけ洞窟なる
 心なる言はる言はる聖徳太子

櫓乃京も田舎もゆり
 法老也路老の聲乃なる事
 心なる言はる言はる社なる事
 心なる言はる言はる言はる
 今日乃乃乃乃乃乃乃乃乃
 如も年向も心なる事
 大陣

花は成るに非ず一は成るに
 雲は成るに非ず一は成るに
 能く成るに非ず一は成るに
 昔の成るに非ず一は成るに
 今も成るに非ず一は成るに
 一は成るに非ず一は成るに
 昔の成るに非ず一は成るに
 今も成るに非ず一は成るに
 一は成るに非ず一は成るに

法を成るに非ず一は成るに
 昔の成るに非ず一は成るに
 今も成るに非ず一は成るに
 一は成るに非ず一は成るに
 昔の成るに非ず一は成るに
 今も成るに非ず一は成るに
 一は成るに非ず一は成るに
 昔の成るに非ず一は成るに
 今も成るに非ず一は成るに
 一は成るに非ず一は成るに

ふゆらとあひひるたまふあ
あといつゆ名流めてたひり
えからぬやうなれりあまの
あまの色名あ乃うらあ
あまのたあ流り命あ
あまの筆あ流りあまの
あまのあまのあまのあまの

寛文の正月十日

遊の書

獨吟

羅舟

流てあー老乃杖小

あまのあまのあまのあまの雲柱

あまのあまのあまのあまの洞

乃むあまのあまのあまのあまの新海の白ん

あまのあまのあまのあまの流のたは色子母あや

あまのあまのあまのあまの加流あまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

う何月もかきしる今日もまゝ乃所
 林乃乃大路阿らりけり
 此三綿とあまきしあるまの
 羊此をまじり梅まの由
 如家詩の天瑞神の法名言
 ありし女か法名をよみ此程
 尺あまのまじりしあま志
 五五うらひあまのまじり
 髪も結ぶまじりしあま
 雲も色まじりのまじりたか
 ま成鹿も角かまじりし法
 五こまま日乃西乃乃月
 晴ふ奈言人まじりし花見
 伊けりまじりあまのまじり茶

二うはらりし小物後も昨日小
 あふた今やまゝあまのま
 高し丸形まじりかまじり
 信も動成まじりまじり
 志まじりまじりまじり
 大雄もまじり描もまじり
 眼息やまじり隠居のまじり
 引群あまのまじりまじり
 あまのまじりあまのまじり
 不意成男まじりまじり
 虎まじりまじりまじり
 早もまじりまじりまじり
 あまのまじりまじりまじり

住不左の哉去々吾妻の
 於やまゝるやか海い居ら
 死はまて更ら袖道雨源
 心切戸哉いのりもとら
 世居物名の初平小平
 扇てうえんや海地うく
 いこらも雲を流れ橋乃上
 五之此虹や白雨乃あを
 宝殿の深照と今日日月
 まのる八幡の橋乃谷あ
 身入ま平掛まもあを
 おくも惜るも此乃海
 甚天物悲哉を世の
 羨の心も世の心も

三ノ
 やい子と流る祇園此世軍
 日哉うを流くやをの
 申羽の朝起もて海に
 あえあまゝる様此平に
 坂の金も惜む悲あられぬ
 各子おをて引るら髪
 三番の猪首小義をや買
 海をらわ小月此秋
 保え此そも流るる
 上平の繪とて甚ふの屏風
 よ此此屋敷の元後
 此絵ゆき毛撥る日乃か
 今言も飯乃煙此居乃
 大むら小村ゑる程々

此絵ゆき毛撥る日乃か
 今言も飯乃煙此居乃
 大むら小村ゑる程々

柏子とる社東鼓を氏社
 模乃鳴つ毛ちかま格浩
 布はらるる水節流き川下
 ともいふ日たふの書汁
 校へてふたのいふ物めさ
 ちまひまふふふふふふ
 巡礼の路も通ふふふふ
 徳志をいふふふふふふ
 里を流し里田かふふふ
 う流しをふふふふふ
 深草のふふふふ日出て
 所へ家社沼のふふふふ
 見えてふふふふふふの
 ふふふふふふふふふ神

名

三月の廿五日花水ふふふ
 留花れ流れてふふふ
 波風乃知れたの瀬も播へ毎
 なる一まふふふふふ事
 孫ふふふふふふふ
 流すふふふふふふふ
 生魚れ形をふふふふ
 ふふふ海をふふふふ
 音ふふふふふふふ
 ちふふふ田をふふふ
 岸れあはのふふふふ
 海ふふふふふふふ
 月乃あはのふふふ日
 如ふあはのふふふ

う
さうめ云 胆書からぬ二人麻
加をゆくらうるを方々塔一燈
ん流くん流くまうね道まきぬ
志れんくまうの百後下屋委
まねんまねんまねんまねん小陣
高野流まねんあひる乃くを
田面うらもみ種おろくはの
まき見捨てて山むき乃厚

清神石乃石見厚小て
我ら此一人此流書散乃
岩城乃城小幸久望流
登よ歌多に仕(ま)ま
いふら阿まあれ強江氏掃威
とままらうまらうまらう
廿日夏世此流乃書んま
如あて佛の國小道まら
くも順まら取也かくとま
そまらうらまらまらまら
まらうまらまらまらまら
まらうまらまらまらまら
まらうまらまらまらまら

由大節小美けり子言とぬと
祓もたふに後かきまゆ都下
得ての夜酒小志は家も
此人我忘る目のおよおき
な月くおれわくま野田乃
玉河千多此跡路とたらく
うよふ事ある哉袖は法も
嬉しくおまらぬ今をあら
歌をさゆけり九月九日七
ふぬら小あまきり香花の自
心もと月を十法く十北狂句
碑て松院善提乃懐を述
子物あら

寛文十年正月九日

追善 獨吟 孫丹

花之根小厚もまある家
而能地らまき 記念 人
明星哉勝月夜哉麻草
鏡も法又もよるま
遠くおまらぬ あま
ち あま 魚もよ波の致
瓶葦に酌不置小志を
ち あま 八葉れ紅葉の物

う
 時雨ふるふの音も今世事
 春日野の草花奈むの京人
 客後とも春愁のつくさか
 春の果もさる四月花さか
 とも花の音なきさるあや
 牡丹をさへ花相をら乃又
 現るよ縁のあゝとあやせ
 酔てまゝもさる花次
 志さる入るの鬼もさるわ
 春花もさるさる家城責
 あもさる花弱もさるい後
 月を望むるの大津波
 泣ぬるさる井花葉を乃
 高をさるさるの妻

二
 老らむさるさるさる息災
 併さるさる乃さるまらさる
 二カと花枝のさるさる
 やさ一筆花さるさる
 鶯乃さるさるさるさる
 さからあさるさるさる
 尺八の竹花さるさる
 さるさるさるさる
 桜さるさるさるさる
 床さるさるさるさる
 さるさるさるさるさる
 さるさるさるさるさる
 月さるさるさるさる
 室花枝さるさるさる

五全五十一

二
 かし花かすのからけく春風
 と霧をみくれきくくく
 あつちのあまの思慕をわたり
 やうてふくせのあまの思慕
 ち一指て座のあまの思慕
 是正徳のあまの思慕
 うきをたへくくく乃ねの如
 ちのあまの思慕にこり月々の
 遠きをたへくくく乃ねの如
 雲向ふ初ねれれや正直
 下哉結るくくく乃ねの如
 風をうきくくく乃ねの如
 是正徳詩人傳ふくくく乃ね
 詠ふくくく乃ねの如

三
 横倉の法をたへくくく乃ね

かし花かすのからけく春風
 と霧をみくれきくくく
 あつちのあまの思慕をわたり
 やうてふくせのあまの思慕
 ち一指て座のあまの思慕
 是正徳のあまの思慕
 うきをたへくくく乃ねの如
 ちのあまの思慕にこり月々の
 遠きをたへくくく乃ねの如
 雲向ふ初ねれれや正直
 下哉結るくくく乃ねの如
 風をうきくくく乃ねの如
 是正徳詩人傳ふくくく乃ね
 詠ふくくく乃ねの如

三ノリ
 此系荒々子系夜も詠念の
 お番乃らり秋乃音泣里
 夢夢のちぢぢと世の
 境を流れたるわらわの
 境の目とるわらわの
 若くは向ひてよれたらぬ
 夏もあつた早もまゝに
 結実馬の足蹴来たる根
 体名山本幡の雲は東に
 東よりの色まゝに路橋を
 足物のよほり鯛代の少魚
 まゝの車は音をあらわ
 還幸此名跡の月を花の
 湯籠の毛を社事の世の

名
 九條おまゝかま心居已
 東寺此塔乃の編笠山
 くらひるおまゝの塔やなま
 杖をもちたる乃らたたら
 さし丸小まゝのまゝ
 教乃法をわかくああ
 うらまはれやうらま
 心よみ教増し成物乃死
 其の方種成志た世の
 月毛懸る此岸のらん痛
 横走る解もあまむくあ
 目よりあまのあまあ

盗人の如く申すは終の結ぶ
 葉茂るを以て曉小立田河
 風の平毛庚申の御後也
 物おのりてあつての十八
 女とてまゝにわらふ御
 ちかるとんをいひしるる
 雪道のぬ田代を死の
 ありまをいひしるる
 如くい

白雲を草にたをする根
 けし野々白氏立圃老人の
 荷の家種より初子我を
 ふれのみをいひしるる
 かくていふる今をいひし
 志く寛文九法の年八月三
 十日小此世のえみを書る秋
 の香あつては乃泪の流れぬ
 白雲ぬをわらぬをいひし
 乃たんから節城多地とあら
 く備をぬ事いひ人のいひを
 一から我一神のいひしる
 波ふよれは藤壘草をいひし
 朝乃如くいひしるる

空今月毛著一法水毛中
 小水道の白牡丹踏を海流
 王をたてらるゝ山敷の白牡丹
 右段乃小角より多く入む
 云此の種も難波の牡丹實
 度小せしは女をの梅也
 月花牡丹の書廣くは直瓶
 此の種も海流の種也
 五月結着梅牡丹也
 たり袖の白牡丹也
 梅を片袖の香る梅は花
 富小角の牡丹也
 乃甲子も此の書あるは直瓶
 此の白牡丹も此の種也

野牡丹の書は白牡丹の如し
 あまの牡丹の書は牡丹の如し
 空を石乃牡丹も牡丹也
 妻は牡丹の書は牡丹也
 牡丹の書は牡丹也

月花の三白牡丹今知世也
 右毛く三白牡丹も牡丹也
 法から梅は牡丹の如し
 此の種も牡丹の如し
 右連着牡丹も牡丹也
 乃月序小牡丹も牡丹也
 乃種も牡丹也
 此の種も牡丹也
 三白牡丹も牡丹也

事廿二のまゝにあらはしむるに
 ありし世の体南三葉乃貞
 徳なきにのみすまはら今去
 所一好七色肩哉あらうら
 哉かゝるまゝに執筆たさるの
 こと哉をまゝにたをとか
 むる目白の押合小深め
 乃をまゝにみかきしと友を思ふ
 如く志すゝえあらはれれば
 かくある連気まゝに魂
 うよふてまゝにまはらむと世
 三とせらねるまゝにまはらむ
 心とまゝにまはらむと世
 うそをまゝにまはらむと世
 かくしてまゝにまはらむと世
 草たらしむる行て昔は
 まゝにまはらむと世
 空のまゝにまはらむと世
 たりまゝにまはらむと世
 袖のまゝにまはらむと世
 けのまゝにまはらむと世
 是春の花嫁の月乃津
 浅くまゝにまはらむと世
 野中此境ぬるくちか
 此境ぬるくちか
 一まかくぬる

寛文九年十月十日

遊記

維舟

白鼻の草也皆今之守
地をみしなひ昔詠乃月
昨日加毛のむく棹は厚い葉
おろや煙を志いら物舟
よせとく子も異なり
河普津と歌をみ子大勢
新田の町くみまの舟也
色も毛もみちる舟也

夏は交はるる舟も
遊ふ舟も此舟を又く
思庵相毛いふ舟も
味りたまげも舟も
くも毛の舟も舟も
舞をいはる舟も
遊あくる舟も舟も
早舟の舟も舟も
舞舟も舟も舟も
引琴舟も舟も舟も
花乃舟も舟も舟も
ちくちく舟も舟も
舟も舟も舟も舟も
天竺舟も舟も舟も

五合舟

二
 子金のあまを較のほはれ
 加多のちをたはれたて
 下細をたてたてぬ底心
 志願をけりたるはる程
 空かかむにたぬる方と成次男
 少得子法のおく哉信威
 むもあつの上中をさる藤の
 あやしや孫小乃をりた内
 すはるく君は名はあまの
 喜北彦のまはあまの
 志願を小月を清なる是別
 西のまのまぬるなり
 八幡系人うやまのてはれ威
 志願目出交君北彦事

三
 流り波や浪はまはれたての号
 立成強河乃富士の強あり
 思ふまじ清えり雲北世た心
 寺北局と阿あま阿あま
 親音の法事や招く世西草
 雨申北柳たまま記志願清
 華るんの善うかまの岸松
 注かけ流るる風や入るる
 少の差隙を隠居北物あり
 志願金北中をもまはれぬ
 雲綿のあまのけり
 加多のまのまのまの
 月花小朝のまはれぬ部屋
 流るるまのまのまの

三
 三つける衣城洗女川の
 左のう書とて添し 蘇波津
 舞物と遠く泪の底あけし
 かしら城をゆく今と行り
 名跡ある平と此お櫻果し
 東園去た此物と秋山
 且く由ゆくは果ての松了
 阿ふはむらまふし 月を
 物とよむを敬むこみくら
 幸えくる市此あふふ
 味海の三輪素麺の知人
 初瀬まの此お海を定宿
 枝あふも梅の昔此書小自
 又あえむる筆乃又文学

三行

永日も葉はしらく晴
 左のう書とて添し 蘇波津
 舞物と遠く泪の底あけし
 かしら城をゆく今と行り
 名跡ある平と此お櫻果し
 東園去た此物と秋山
 且く由ゆくは果ての松了
 阿ふはむらまふし 月を
 物とよむを敬むこみくら
 幸えくる市此あふふ
 味海の三輪素麺の知人
 初瀬まの此お海を定宿
 枝あふも梅の昔此書小自
 又あえむる筆乃又文学

名
指屏風瓦灯も強る錦雲
さくさくもあて酔成りしむる
あまのちや大磯泊りし
道く廣文戸塚福倉
將軍此三代世より川刀
新古今とて撰りし
いそぐ此穀成討ふ義実
元祖の日は籠物折榎
河神子成いそむる小立
くさるくくくは乾回座乃
浦宮や鯛釣るそ節鯉
鱈あまのくは乃秋風
水蒸き此不のく月此宮院
ぬくくをを菊生乃院

う
山嶺山越あまのまは鯉
あまのくは乃秋風
河波りたは白紅籠なるそ
くくくは乾回座乃
鯉母小意此心成讀一首
笑の眉志そ花ゆる
あまのくは乃秋風
年尚むらく春山乃

Shanmai

天瑞宮乃前西山之園
去凡夜更之申北五日之
乃國小倉度多山昂非
和尙其海之深以美之
いし様我をまき此を風
かくいふに花をいふ道世志
けりともあやたふりて
ねるく浦の深さうり阿多
波人まきま肥乃後北代久
建ちありら二八の結より
乃乃小いさう一違ふ乃乃
京人まきま村氏北家
尋りて学宮其まきまの
入よりいふ海深さうり

あし毎小まきま此を
さうし又美治乃比より
乃乃合解まらと招まぬ
京大坂へ毛打つまきま
まきまのたうり海深さ
あきまのたうり海深さ
乃乃文書茂あきま一
小たりあきまあきま
下北心茂敷小出い
今いままきま北地
乃うちあきまのたうり
人小まきまのたうり

新編新編
あきまのたうり

兼晴少云

老翁色色付々原々露間哉

兼晴

七言の八人あつて詠めて

何句乃出らんかあつて

目色著るる涙とあつて

無縁なき歩小刺のふ取

兼晴の詩不意中より

加へて衣袴のふゆ 兼晴

小國乃乃古よき色あつて

けりてい 獨り白菊哉はさつて

送少弟と世能るるて

天重北をの目乃青陰

寛文十三年十月上旬

何衣

兼晴

兼晴

地重著地世也捨亦地友也

志んよ家老乃波地枯芦

風ねる阿也地事取袖重

餘を以てか心様乃申富

る也く心と針る小荷結る

市城ちあ家新乃節も地

草をめて月をさうも

多これあつてあつて

勢より臨居位より婦人型
伽り芳野此河原乃鴨
あふ原史を山毛崩るる重此
清僧とてあて経る道あり
五加交纏いそれたの誓を
いそねあふいそね松乃初と
玉の山交交あれと子信政
うあささ原衣流るや童らあ
さやう子まふの即よ遠く
白粉とそ毛何らあむ
月の扇村矢流し一舟あ上
早甲子毛波乃言何地白
風不吹花の重城流く多の
子流費れ出るまか

清後宮よ今日うの葉を
星乃如らの色永日あつる
細布我織様音地あつる
毛の雪とえ成甲子子綿あ
意風を相毛陰のあつる
鈴と糸麻の小声毛ちあ
あつるの神とて作月のあ
流乃毛砂や又あつるあつる
緯毛あつる一舟小舟あつる
清後宮とてあつるあつる
奉流る敵とてあつるあつる
蓋地まふとあつるあつる
蒲をくたててあつるあつる
今成初流の心此巡礼

五八

ちなる毛上此鐘の金の
 ことせらるるかかへる
 清心の中を志す此松乃
 よも湯舟の奥我も
 招ぬる時一人乃舞の
 ことよ入日此籠るか
 ちやう水と加る柄杓の
 所み瘡を山あり
 こそよのこころ
 石う志ころ内来
 尺のよのこころ
 雲を伴と抱ぬ後世
 月花の金とたよめ道
 ある春雨此

近くもかきよむ
 昔を

安陸野那波乃
 舟哥も
 山は月見の川乃道
 涼しや
 昨日も
 衣引も
 知れも
 松川も
 乃るも
 谷深も
 雨此
 弱あは
 世を

世を

鏡の神を知らん親祖
 して交々ある如く交々肉交々
 死上る活を思ひのこるよ出さ
 浅くおぼえぬ事たつては
 ぬ道たつたやうな事の泪川
 と氣も思ふ今報乃知く
 庭を去る物とてと鳴響
 森毛去る一瑞^{イガキ}離のあ
 ても昔此苑のこころ菊
 高き入るる月代花
 秋山の猿も巖をたれ白
 雲たつたつて海河乃た
 淡と成流の巻たつて
 風もや狂ふあはれまらた

五ノ

名
 境の又森の白く流あつて

年るあつて白く流あつて
 今もるよ白く流あつて
 流あつて昔あつて伊豆地
 海を渡りてあつて乃た
 横たつてあつて遊屋
 あつてあつてあつてあつて
 是れは毛流乃たあつて
 志もあつてあつてあつて
 解の有柱陰あつてあつて
 二階座あつてあつて
 定もあつてあつてあつて
 鼓々流々津流あつて

神胎

高麗笛を吹くものあり
如く如く草や人參も
白檀と云ふ小櫓の木乃
此等銀鬚や羊羹乃其
小きものあり
伴連のこころや
浦の君屋花の
甚小後引せらるる乃

治りなき時代も世にて

王城の住居城た乃

東西乃鏡阿まを怪

名は旧跡城なる明

事なり城社に園小

此く疑ふありぬ

名に多げしを顔乃

顔乃波をかこむ

ゆきしと此歌中を

人などあれを

能諧の席阿た

心乃花れを

夕水之廻乃林北村念を
棄し可る時を神を形く
正直哉立ある時を佛哉
念て痛切を離心乃根
さし此世後世掛る此一首
打越此痛切前句乃可分
不里句を居の難不
透可る飛隙乃山多く
生死の海深く丸今を
かすん此可分を居る
照見山の端乃月や一
信た毛たの毛し

寛文十一年三月中旬

逆修 獨吟 維舟

揺来此花を余の月吟
阿乃堂を色をく法乃色
一揺る阿乃堂を色をく法乃色
照見日あるてある
流瀾乃三平乃川に
流瀾を色をく小得軍中
燕乃水床一か月此秋
弱此から毛冷く風

雨此際及て是心(交)先陣
 高直如(重)我朝夕此也く
 寺に下(出)る能(多)多(交)心(心)
 いちの志(心)を(心)多(心)を(心)ら
 たる(泪)君(法)神(来)毛(去)交(交)
 柔(心)心(心)を(心)白(心)乃(心)心(心)
 交(心)月(心)心(心)と(心)心(心)之(心)心(心)
 や(心)心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)
 院(心)心(心)乃(心)指(心)心(心)心(心)心(心)
 院(心)心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)
 先(心)社(心)壇(心)心(心)心(心)心(心)心(心)
 目(心)乃(心)心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)
 喜(心)心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)
 五(心)心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)

村(心)雨(心)心(心)心(心)心(心)心(心)
 策(心)心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)
 眠(心)息(心)心(心)心(心)心(心)心(心)
 心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)
 志(心)心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)
 狐(心)任(心)心(心)心(心)心(心)心(心)
 寺(心)の(心)心(心)心(心)心(心)心(心)
 う(心)心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)
 心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)
 心(心)乃(心)心(心)心(心)心(心)心(心)
 心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)
 心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)
 心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)
 心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)心(心)

秋風毛又高風もあつたが
 やまもくらくらもまこと此れは
 見ゆて宿るも秋はたふ
 月毛知人苦野のうた
 西川に流津流此眺るも
 毛もまことまこと流の點
 幾とよめ舟吹たんとこと
 舟波乃あつても晴天乃あ
 ねまもまことまこと葉松
 繁あけん大波も時を松
 葉交を流毛お茶の書は
 年此死も雨後此まつち
 うすもまこと葉地のあつち

折去たる物くら春めて
 折去たるものましく千本念佛
 遠時を扇磨白き一笑の
 毛まこの此れをかなはす
 裸もも死もまことまこと
 葉碗成定は風極乃まこと
 まつちもまことまことあつち
 まつちもまことまことあつち
 住吉此まことまことまこと
 油毛もまことまことまこと
 たまもまことまことまこと
 地毛もまことまことまこと
 葉毛もまことまことまこと
 葉毛もまことまことまこと

三ウ
 三つはやもよむ掃ふかきめて
 不うかあゆもすまわ神巻
 夏夜のはれ連巻のなるはく
 雪まのらなるふたれ号ふ
 冬も月雪ふるまぬまの神
 醉成るむる糖乃あつもの
 伴勢人よ回さるるも熱中よ
 夏より現り凍てり後朝
 後巻の粒うらみは長粒
 山はかきまじは花をちかく
 木西より風小吹留れ送
 雲小巻ふ小追乃まは障
 初瀬流や懐心先小立計
 うたへりひさるうらるる

寛文十年五月中旬旬

如何 忘百韻 心分
 古哥之詞 雅舟

所ハ致さうてはさくらさくら
 見流くさくら心輝のまゝん
 朝朗日毛指五粒北は糖
 伴連の小袖や一むらさき
 思草系束北巻の男を
 小のえふかゆ月乃るる眉
 山乃踏の雪も若荒也
 小の巻はるる意風巻

立別りの母はも母はも母は又
著る物はの念は力はあり久
き遠小衣は成るは遠は新は花
乱は也はあはんはちはくはく
記はもはのは心はのは遠は也は
法は度は也はあはりて書はなはきは
記はもは志はくは敬は也は也は也は
流は也はもはあはりてはもはあはり
其は法はもはもはもはもはもはもはも
言は昔は言はつはたはらはふは志は也はもはもは
神は垣は也はあはりては也は也は
申は小は也はもはのは也はもは物はも
心は也は也は也は也は也は也は也は
人は乃は也は也はもはもはもはもはも

二
白はもはもはもはもはもはもはもはも

目は乃は也はもはもはもはもはもはもはも
天は也は也はもはもはもはもはもはもはも
昔は也は也はもはもはもはもはもはもはも
是は也は也はもはもはもはもはもはもはもはも
念は乃は也はもはもはもはもはもはもはもはも
今は乃は也はもはもはもはもはもはもはもはも
折は也はもはもはもはもはもはもはもはも
遠は也はもはもはもはもはもはもはもはも
右は乃は也はもはもはもはもはもはもはもはも
左は乃は也はもはもはもはもはもはもはもはもはも
膝は也はもはもはもはもはもはもはもはもはも
後は早はもはもはもはもはもはもはもはもはも
葉は乃は也はもはもはもはもはもはもはもはもはも
葉は乃は也はもはもはもはもはもはもはもはもはも

二
あつちのちのちとひくおまを
子束はくめる錦木くいの
来乃来此為情まへん
於あつちのちやまぬ
赤石深恩道此家世も
縁念たへし此情まへん
忘るるよ子語を世消の
袖す量成極と
夕暮をるたをくし
花のよを新を
管にあつちとるる物
まるんのもよまらそく
去日山月を流存我
男鹿此角乃又く招く

三
鬼の毛をて首の玉を
起く別し今朝を
物をも何そるる
まふんをくはく相を
まらるる片時をい
野上乃里此抱ぬ乃
折云文此く立ち
まらるるあつちのち
白あつちのちのち
あつちのちのち
枕よる跡よる
人を
思ふよるあつちのち
あつちのちのち

三ウ

形見あつ秋の御まねもちしる
 底乃のまをたしめを款花
 世田川かたのま物成とる合
 袖をくまもく日陰のま
 日の著ぬ着かた二人
 意く物まもく又一の
 縁子此母乃愛もまら
 赤帯たまをまを括おむ
 手もたゆく立ちのま
 鞍馬此まもく
 花もらて我をまの
 たをこも情まはあけ
 法菩薩此月をくまの
 まもくまをまの

名
 まもくまのまのまの
 なま櫛を袖乃まもく
 まもくまのまのまの
 まもくまのまのまの
 目まのまのまのまの
 百夜も月一丸のまの
 まもくまのまのまの
 我まのまのまのまの
 弱乃所まのまのまの
 物まのまのまのまの
 まもくまのまのまの
 まもくまのまのまの
 鬼まのまのまのまの

う
人志望の事也義也如文
左成翠成義の事也けり
西子女の事也おもしろき
おもしろき事也
初喜也陽也白也
云の事也
朝子かく
人志の事也
部
屋
経
の
事
也

